



Title	SAYONARA「公衆衛生に国境はない」第84回日本公衆衛生学会総会シンポジウムおよび自由集会報告
Author(s)	大西, 眞由美; 西原, 三佳
Citation	目で見るWHO. 2026, 96, p. 12-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105786
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

SAYONARA「公衆衛生に国境はない」 第84回日本公衆衛生学会総会シンポジウム および自由集会報告



長崎大学生命医科学域（保健学系）
教授

大西 眞由美（おおにし まゆみ）

看護師・保健師、Master of Public Health、博士（医学）。
JICA長期派遣専門家等を経て、2008年より現職。



特定非営利活動法人HANDS
理事／プログラムオフィサー

西原 三佳（にしはら みか）

看護師・保健師、Master of Public Health、博士（医学）。
協力隊や専門家として主に中南米に関わる。大学教員を経て、現在は大学非常勤講師および現職。

「公衆衛生に国境はない」 のシンポジウムも自由集会 も開催できた日本公衆衛生 学会

2025年10月29日に静岡市で開催された第84回日本公衆衛生学会総会にて「公衆衛生に国境はない」を題したシンポジウムと、日本WHO協会の後援のもと19回目となる自由集会が行われました。この「公衆衛生に国境はない」は、現日本WHO理事長の中村安秀氏が発起人のひとりとなり、1999年の公衆衛生学会総会にて自由集会が開催されたことに始まります。初回の自由集会では、「いま、私たちに求められているのは、先進国や途上国を問わず世界各地で同時代性に行われているさまざまなチャレンジから謙虚に学び、グローバルな視点を共有すること」「日本の地域保健の問題のほとんどは、地球規模で考えればすでに多くの国で試行錯誤が行われている課題である」「『公衆衛生のボーダレス』の時代に、わが国の公衆衛生をグローバルな視点から見直し、日本の公衆衛生の成果を国際保健の現場に応用し、国際保健で学んだ経験を日本の公衆衛生の発展に活かしていきたい」との趣旨が説明されました。（表1）

それから26年が経ち、インバウンドや技能実習生など外国籍住民が日本国内

で増加の一途をたどり、多文化共生の重要性が謳われている一方、排外的な主張も多く目にするようになった現在、グローバルな視点の共有と、わが国の公衆衛生をグローバルな視点から見直し、国際保健での経験と日本の公衆衛生の双方向的な知の共有がますます重要になっていと言えます。また、26年前に「『公衆衛生のボーダレス』の時代」と言っていたことが現実の状況となり、それを強調する時代ではなくなったのではないかと、との認識から、今回、同じテーマでシンポジウムと自由集会の両方を開催し、一旦区切りをつけることにしました。

国際保健の経験を日本の公衆衛生に活かしてほしい （写真1）

シンポジウムの冒頭、座長の中村安秀氏から、「いま公衆衛生学分野においても、国境を越えた相互交流がすすんでいること」、「かつて私たちが途上国（developing countries）と呼んでいた国で、深刻な貧困、識字率の低さなどの課題に向き合い奮闘してきたが、日本国内においても同様の課題が浮き彫りになってきていること」、「そして現在では途上国とは呼ばず低所得国（low-middle income countries）と呼ぶことが多くなったが、国の所得の多寡にかかわらず、同時代的に発生した課題に対して、地球

規模でお互いに情報交換し、学びあう時代が到来したこと」、そして、「相手国の人々の文化や宗教に配慮しながら最善の保健医療サービスを提供してきた国際保健医療の経験と知恵は、日本国内に在住する外国人コミュニティはもとより、日本国内の公衆衛生の実践と研究にも援用できるものであること」、「地球規模で長年にわたって取り組んできた国際保健医療の成果と教訓を活かしつつ、日本の公衆衛生学が国境を超えて大きく門戸を開き、世界各地の実践、活動、研究と積極的に交流し発展する輝かしい未来に期待したい」といった趣旨説明がありました。



写真1 シンポジウムポスター

表1 自由集会のこれまでの開催実績一覧表

回	年	開催地	世話人	自由集会テーマ&スピーカー	公衆衛生学会テーマ
1	1999	大分	中村 柏樹	「総論」(上畑鉄之丞) 「保健政策」(柏樹悦郎) 「へき地医療とPHC」(高木史江) 「保健婦として」(大西真由美)	健康確保のための社会的施策の展開
2	2000	前橋	中村 丸井 柏樹 萩原	「HIV/AIDS:日本とカンボジア・タイ」澤田貴志 「看護と国際保健」北原みどり 「公衆栄養の現場と研究の架け橋:ブルネイ王国での第1回国民栄養調査」吉池信男 司会:富山紀子	温故知新 過去を顧み、足もとを見つめて、将来の展望をひらくこと
3	2001	高松	中村 丸井 柏樹	柏樹悦郎	21世紀の社会と公衆衛生
4	2003	京都	中村 丸井 柏樹	神田秀幸 常松典子	公衆衛生の新しい展開をめざして
5	2004	松江	中村 柏樹 富山	話題提供:大石和代、坂本真理子 ファシリテーター:高橋謙造、富山紀子 コメンテーター:石川信克、水嶋春翔	地域に根ざした公衆衛生活動
6	2006	富山	中村 柏樹	富山大学医学部学生によるグループディスカッション 司会:柏樹悦郎	健康な社会 安全・安心への公衆衛生からのアプローチ
7	2010	東京	柏樹 渡辺	話題提供者:大西真由美、高木史江、垣本和宏 ファシリテーター:中村安秀	公衆衛生の発展に向けてー調査研究から政策へー
8	2011	秋田	大西	【国際保健の立場からの東日本大震災『国際保健は災害医療に役に立つか?』】 スピーカー:仲佐保、西原三佳、羽根田潔	公共性の地平からみた公衆衛生の将来展望
9	2013	三重	中村 仲佐	【ポストミレニアム開発目標と今後の方向性?】 スピーカー:高橋謙造、仲佐保	変革現我が国の公衆衛生学の現状と課題 隣接諸科学との対話
10	2015	長崎	松井 大西	【地域における健康危機管理対応】 スピーカー:奥村順子、大西真由美 ファシリテーター:松井三明	ライフステージに合わせた健康づくりを目指して
11	2016	大阪	中村 垣本 大西	「国際保健政策人材の養成」仲佐保 「日本小児救急医学会熊本地震報告」井上信明	次世代の健康社会実現のための公衆衛生人材育成
12	2017	鹿児島	大西 垣本 仲佐 中村	【感染症対策:温故知新】 「検疫制度/検疫所の歴史」垣本和宏 「島津藩の感染症対策」帖佐徹 「感染症対策:緊急援助隊感染症対策チーム派遣/黄熱病」杉浦康夫	明治維新と薩摩と公衆衛生ー公衆衛生の黎明期を支えた地から未来への発信ー
13	2018	郡山	大西 中村	【国際保健医療のキャリアナビ in 福島 & その後】スピーカー:後藤あや、富山紀子、北瀬	ゆりがごから看取りまでの公衆衛生ー災害対応から考える健康支援ー
14	2019	高知	大西 中村	【国際保健医療活動と災害保健医療活動】 スピーカー:神谷保彦、神原咲子、菅沼成文	実践と研究との協働の深化ーマインドとコンピテンシーー
15	2020	京都 online	大西 中村	【感染症とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ】 「エボラウイルス病だけではない、コンゴ民主共和国」仲佐保 「新型コロナ対策:支援する・支援される、日本の現場最前線」 豊川貴夫、川崎涼子	健康・医療・介護の未来づくり: Social Joint Venture (社会的協働)
16	2021	東京	大西 中村 仲佐	【COVID-19で取り残されてしまった人達】 「SDGsと新型コロナ:外国人を取り残さないために」藤田雅美 「『やさしい日本語』による医療格差の縮小」武田裕子 コメンテーター:中村安秀ファシリテーター:仲佐保	社会の組織的取組と協働で人々の健康をまもる
17	2022	甲府	大西 中村 仲佐	【ポスト・コロナ時代の国境を越えた学びあい】 1. 大西真由美(長崎大学) 2. 植田紀美子(関西大学) 3. 堀内清華(山梨大学) 4. 加藤美寿季(大阪国際がんセンター)	公衆衛生イノベーションー原点確認、変革推進ー
18	2023	つくば	大西 仲佐 堀内 後藤	【Beyond SDGsとしてのプラネタリーヘルス】 講師:渡辺知保(長崎大学)、橋爪真弘(東京大学)ファシリテーター:中村安秀、島津美寿季	実践と研究のシナジーが織りなす保健医療介護サービスの進化と調和
19	2025	静岡	大西 中村 仲佐 西原	【SAYONARA『公衆衛生に国境はない』 26年目の自由集会から未来へ贈る言葉】ファシリテーター:中村安秀、大西真由美	フェーズフリーの地域づくりと健康危機管理

3つの実践モデル：母子健康手帳、心理社会的支援、移民の健康

その後、3名のシンポジストから、国際保健医療の成果や教訓と共に、日本の公衆衛生にどのように活かすことができるか、といった展望も含めお話がありました。

最初に、大阪大学大学院の當山紀子氏から「インドネシアとパレスチナの母子健康手帳」について発表がありました。日本発の母子健康手帳が、現在は50以上の国や地域で使用されるようになった現状と共に、パレスチナでは情勢不安による移動を余儀なくされる中、継続的なケアに必要な情報を記録した母子健康手帳は、母子の命を守る「命のパスポート」と呼ばれていること、またスマホアプリを活用した子どもの成長記録になるような工夫がされていることなどが紹介されました。さらに日本国内の調査結果から、母子健康手帳の電子化の必要性が示唆されている一方、手書きの記録や紙媒体の利点もあり、紙と電子の併用が望ましいこと、母子健康手帳を導入している低所得国の中には、すでに紙媒体と電子母子健康手帳の共存が図られている国もあり、今後の日本の母子健康手帳の展開において、海外の取組みから学ぶ意義が示され、世界の母子健康手帳の取組を共有

し、学び合うために開催されている母子手帳国際会議が紹介されました。(写真2)

地球のステージの桑山紀彦氏からは「今や国際協力の現場における『心のケア』の標準モデルとなった心理社会的支援とは」についてお話がありました。日本ではまだ十分に知られているとは言えない心理社会的支援 (Psychosocial support: PSS) について、そして「心的外傷と回復」の理論を基軸に展開するトラウマ・ケアのひとつのモジュールである PSS ワークショップについて理論的な説明がありました。さらに東日本震災やウクライナ、ガザで実践されている心理社会的支援の様々な取り組みの紹介から、トラウマを「向き合うもの」から「共に生きていくもの」と自然に受け入れていく過程を経て、やがて「回復」を迎えていくという、そのプロセスを紛争地の子どもの言葉と共に紹介してくださいました。そして、心理社会的支援は、決して精神科医や臨床心理士のような「専門家」と呼ばれる人を必要とするものではなく、ファシリテーターによるものであり、それは「愛」と「想像力」をもった誰にでもできるものだ、というお話がありました。最後に、世界における心のケアを、それぞれの地域で少しでも多くの人との関わりをもつ開かれたメンタルヘルスケアとして展開していくきっかけにしたい、と呼びかけがありました。

国立健康危機管理研究機構の岩本あづさ氏からは「移民の健康—グローバルな公衆衛生課題」について、お話がありました。世界的に、紛争、災害、貧困など様々な要因により国境を移動する人たちが増える中、受け入れ国にとっては欠かせない労働力となっている現状がある一方、移民は受け入れ国の社会の中で脆弱な立場に置かれやすく、保健医療システムの枠組みから取り残されることも多いとの説明がありました。日本国内の在住外国人も同様に、保健医療サービスへのアクセスにいくつかの障壁が存在しており、特にコロナ禍でそれらが浮き彫りになったこと、そして保健医療へのアクセスを改善する試みについて紹介がありました。移民の健康は世界的な課題のひとつであり、日本国内の在住外国人の保健医療の課題は、国際保健医療協力と深くつながっていること、そして「移民」は遠い世界の「他人事」ではなく、移民の健康を守ることが受け入れる社会全体の健康を大切にすることに繋がるという、国境を越えた公衆衛生の大切さや、外国籍の方を含む取り残されがちな人たちの健康を守るの意味について、お話がありました。(写真3)

その後、国際保健医療の成果と教訓を日本の公衆衛生学の発展に活かすためには、という視点から、活発なディスカッションが行われました。最後は50年後



写真2 第15回母子健康手帳国際会議



写真3 「未来に向けて、過去と現在をふりかえる」—移民の歴史(日本)



写真4 シンポジウム写真



写真6 自由集会写真

第84回日本公衆衛生学会総会
自由集会

SAYONARA 『公衆衛生に国境はない』 ：26年目の自由集会から未来へ贈る言葉 Public Health without Borders

開催趣旨：1999年、大分で開催された公衆衛生学会総会において、自由集会：第1回「公衆衛生に国境はない」を開催した。これまでに18回の開催実績があり、延30人以上の主として国内外のグローバルヘルス／国際保健分野で活躍しているスピーカーから話題提供をしていただいた。この四半世紀の間に、保健分野に限らず、ボーダレス化は進み、「公衆衛生に国境はない」は一般化された。声高に「公衆衛生に国境はない」と言わなくてもよい時代になり、この自由集会も一定の役割を終えるタイミングではないかと考えている。

開催趣旨(続き)：これまでに話題提供してくださった方々、およびこれから「国境のない公衆衛生」の世界で活躍していくと考えている若手の方々から、次の四半世紀に向けてメッセージをいただき、「公衆衛生に国境はない」を再発掘したい。

日時：2025年10月29日（水）
18:00～19:30
場所：グランシップ 9階
第10会場（自由集会902）

世話人）中村安秀、仲佐保、西原三佳
連絡先）大西真由美（長崎大学）
mohnishi@nagasaki-u.ac.jp

※20:30から、静岡駅近くで懇親会を予定しています。自由集会 and/or 懇親会に参加希望の方は、右記のQRコードからformにアクセスし、入力してください。

開催済み

朝のシンポジウムも夜の「自由集会」も語り合いましょ！

写真5 自由集会ポスター

の日本の公衆衛生の役割を見据え「50年後の子どもたちが、この世界は素晴らしいと思えるような世界を残していく」という中村安秀氏の言葉で締めくくられました。（写真4）

同日の夕方には、19回目となる自由集会、「SAYONARA 公衆衛生に国境はない 26年目の自由集会から未来へ贈る言葉」が開催されました。なぜ“SAYONARA”なのか、また“未来へ贈る言葉”とあるのか…。それは、冒頭でも述べた通り、これまでの四半世紀の間に、保健分野に限らず世界のボーダレス化が進み、この自由集会も一定の役割を終えるタイミングを迎えたのではないか、という世話人の意向から、このタイトルが付けられました。

自由集会は対面とオンラインのハイブリットにて行われました。これまで多方面の国際保健医療分野で活躍して来られた方々から、これから国際保健医療の世界に飛び込もうとしている学生の方々ま

で、約40名の方々が参加してくださいました。

自由集会の議論：分断に対する危機感と共生を目指す必然性（写真5）

最初に、1999年から2023年に開催された自由集会のテーマ紹介を通じ、これまでの経緯と国際保健医療協力における日本の立ち位置を振り返りつつ、なぜ今回SAYONARAなのか、そして国際協力から共生の関係をめざしたいという、今回の自由集会の趣旨が説明されました。その後はまさに「自由集会」を体現すべく、参加者一人ひとりが「公衆衛生に国境はない」について語りあうという、自由な自由集会となりました。

公衆衛生に国境はあるのか、ないのか…参加者それぞれの経験、新型コロナ感染症にみられるパンデミックや、日本国内でも外国籍の方々が増えていることなどを踏まえ、ある意味では「国境はなく

なった」という意見が多くありました。一方で、外国籍の方々を含む周縁化されやすい人々が抱える健康課題や保健医療アクセスへの課題、さらに排外主義的な主張が多くみられ分断が進んでいるように見える現在の日本では、国境はなくなっておらず、むしろ日本人個人個人の心の中にこそ「国境」があるのではないか、といった議論が行われました。（写真6）

正解を求める議論ではありませんが、国際保健医療に携わってきた私たちが感じている、分断に対する危機感と、共生を目指す必要性への認識が、参加者間で自然と共有されたように思いました。そして、今こそ国際保健・国際協力に関わってきた私たちが果たす役割があるのではないかと、今回SAYONARAとしているが、このまま終わっていいのだろうか、終わらせないでほしい、という声も多く聞かれる中、自由集会を終えることとなりました。